

大学生の親子関係変容プロセスとその要因 —自立の姿に注目して—

D12-4002 尾崎みのり
指導教員 朝倉隆司

キーワード：大学生、親子関係、自立

1. 緒言

青年期の最も重要な発達課題として、親からの自立が挙げられる。若者は親から自立し、自分の意思のもとに自己実現をはかっていくことが成人期以降の健康につながる。青年期（後期）にあたるのが大学生の時期であり、約4年間の年限で自由度の高い生活をし、将来を考えていくという特性から、自立への準備の面で重要な時期であると考えられる。White、Speisman、&Costosの青年期から成人期初期までの両親との関係の発達プロセスでは、両親から分離した自己を強調する、両親を批判する状態から、最終段階では仲間のような相互性を示すとされている。大学生の親からの自立について、多くの研究がされているが、現代の日本の大学生における要因の影響の仕方や心の動きは明らかにされていない。本研究では大学生の特性に注目し、大学生の親子関係変容プロセスとその要因を明らかにする。そして現代の大学生の自立の姿について考察することで青年期、成人期における健康の一助としていく。

2. 方法

本調査は大学4年生12名を対象とし、予め作成したインタビューガイドをもとに半構造化面接を行った。インタビューで語られた内容に基づき逐語録を作成し、M-GTAで分析した。

3. 結果と考察

M-GTAによる分析から41の概念を生成し、それらを14のサブカテゴリーにまとめ、さらに7つのカテゴリーに統合し、親子関係変容プロセスとした。プロセスは<わかりあえない状態><親の存在の捉えなおし><大人としての意識の構築と行動変容><将来展望の形成><今後の家族との関わり>と進んでいき、影響要因は<意識が変化する要因><ぶつかりが生じなかった要因>であった。学生の意識としては、親への甘えを断ち、自己統制しようとする意識がどの段階の中にも見られた。初めは親から独立しようとするが、<親に対する意識の変化>をきっかけに必要な部分を頼り、可能な範囲で甘えを絶っていき姿に変化していた。しかし、子の年齢に対して親の干渉度合が高いままであると、子に葛藤が生じ、一段階目の<わかりあえない状態>にとどまる。その後に親の干渉のなかでの妥協点を探る姿や、学生側が諦め、合理化した将来を選択する姿が見られた。やりとりとしては対等になっていくが、親子関係は権威を内包した関係でありつづけることが示された。

4. 結論

本研究において、大学生が親の存在の捉えなおしを経験することで様々な面で大人としての意識が芽生える<親子関係変容プロセス>が明らかになった。<親の存在の捉えなおし>の要因として、《家族の変化》《大学生の生活》が明らかになったことで、親子共に発達段階に合った関わりがプロセスをスムーズに移行させることが示唆される。また、大学生が自立において、暗黙の役割期待に沿った選択をしているという姿から、大学生は自身に求められた役割を、親と距離の離れる大学時代に問い直す必要があることが示唆される。